

審査の結果の要旨

氏名 前川理子

前川理子氏の「近代日本の宗教学思想と国家―「新宗教」理想と国民教育の交錯―」は、明治中期から後期にかけて形成された宗教学の思想パターンが、その後の国家と宗教の関係についての思想や制度の展開にどのように関わりあったかを考察した重厚かつ独自性の高い業績である。前川氏は井上哲次郎が礎石を置き、明治30年代に姉崎正治が確立し、その後、加藤玄智、大川周明らの宗教学者に引き継がれていく「宗教学思想」に注目する。「宗教学思想」とは宗教的英雄偉人を尊び、自律的人格の基礎となるとともに合理性を備え、諸宗教の相違を超えていくことができるような理想の「宗教」を描き出し、思想の基軸に置くものだ。

第一部ではまず、宗教学思想の確立に先だち明治20年代までに井上哲次郎らによって提示された「新宗教」言説が検討されている。進化論的な前提に立ち来るべき合理的倫理的社会的および脱宗派的宗教＝通宗教的真理を志向する宗教に希望を託す宗教論だ。この宗教論を姉崎が学的に体系だて、その後の井上哲次郎や加藤玄智や大川周明らは類似の宗教論を提示しながら宗教の国家貢献を弁証しようとする。教育勅語の枠組みを発展させた国民道徳論と理想の宗教像が調和的なものと理解され、穂積八束、吉田熊次ら他の国民道徳論では欠落しがちな宗教性に、国家貢献の役割が付与される。それは諸宗教が国民教化に参加していく際の拠り所としても機能した。だが、加藤玄智や大川周明に見られる人格主義的な国体論的宗教論は国体論の主流になりうるものではなく、超越者としての天皇への崇敬を規範とする上杉慎吉の皇道論による批判に対抗できる力を得るには至らなかった。

第二部では、第一次大戦後から太平洋戦争期に至る時期に宗教学思想に基づく国体論が影響力を保ちながらも次第に力を弱め、かわって天皇を宗教的に崇敬することを規範とする「皇道論」あるいは「国家教学」が主流となる過程が描き出されていく。大正期から昭和初期には、公教育において理想的な宗教にそって国民の宗教性を養うことで国家秩序に貢献できるという宗教情操論が盛んに用いられた。だがその立場は皇道論的な立場から攻撃を受け後退していく。上杉慎吉の皇道論に学び、天皇を宗教的に崇敬する立場から大川周明を批判した蓑田胸喜が国体明徴運動を先導したことは、この時期を象徴するものだ。

長期的視野の下で丁寧に資料を検討しつつ宗教学の歴史をたどることで、宗教と国家という複雑な主題を解きほぐした業績は前例がない。しかし、宗教学思想の担い手として主に東京大学で宗教学を学んだ学者を選んでいること、明治期に形成された「宗教学思想」がどのように変遷しつつ影響を及ぼし続けたのかの吟味が十分でないことなど、改善すべきところもある。とはいえ、直接の主題である宗教学にとどまらず人文諸学と諸思想の展開を視野に入れ、近代日本の宗教と国家の関係という論題に新たな分析視角を提示することに成功しており、その学的貢献は大きい。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。